

# 医家の奏でた音楽―村井琴山と七弦琴

令和五年四月十五日(土)

早川太基

## 【概要】

古方派の大家として知られる村井琴山(一七三三〜一八一五)は、「琴(七弦琴)」を好んで奏でた。本発表における注目点は、次の通りである。

- ・なぜ医者が好んで「音楽」を奏でたのか？
- ・そもそも当時の人にとって「音楽」とは何なのか？

このような問題意識を通して、村井琴山の追い求めたものを探つてゆく。また同時に、村井琴山が好んで奏でた琴曲のうち「滄浪」「南風」「關雉」を、復元演奏する。

## 資料①【「琴(七弦琴)」とは？】

七本の絃、十三の徽、長さは三尺六寸五分。右手で弦をはじき、左手で弦を押さえて音を出す。

↓森羅万象を表現する。

↓音域が広い。

↓伝説の聖王、伏羲あるいは神農が造つたとされる。孔子・莊子・屈原・諸葛孔明・李白・蘇東坡などが作曲したとされる曲が今も伝わる。

・蔡邕(一三三〜一九二)の『琴操』

御邪辟、防心淫、修身理性、反其天真也。

邪辟を御し、心の淫を防ぎ、身を修めて性を理め、其の天真に反るなり。

↓みずから琴を演奏することにより、情感を養い、人間性を陶冶し、本来あるべき自分に立ち返る。

↓「礼楽思想」における「君子修養之器」。

## 資料②【礼楽思想とは？】

まずは「音」+「楽」=「音楽」

・『礼記』「楽記」

凡音者、生於人心者也。樂者、通倫理者也。

凡そ音は人の心に生ずる者なり。樂は、倫理に通ずる者なり。

↓「音」と「楽」の大きな違い。「楽」には、構造・秩序がある。

・『礼記』「楽記」

樂者為同，禮者為異。同則相親，異則相敬。……大樂與天地同和，大禮與天地同節，……如此則四海之内合敬同愛矣。

樂は同たり、禮は異たり。同じなれば則ち相親み、異れば則ち相敬ふ。……大樂

は天地と和を同じうし、大禮は天地と節を同じうす、……此の如ければ則ち四海の内、敬を合し愛を同じうす。

↓「礼」は社会の制度的秩序を、「楽」は社会を運営する人の心の内面的秩序を形成する。相補う関係の「礼楽」。

↓「琴(七弦琴)」の世界では、この「礼楽思想」から派生した一種の音楽哲学である「琴学」が発達した。

#### 資料③【日本人と琴】

日本古代にも琴は伝来しており、正倉院にも「金銀平文琴」が收藏されるが、平安時代には漸く下火になり、やがて廃絶した。その後は、しばしば伝来してはいるが、社会に定着することはなかった。

明の僧侶であった東皋心越(一六三九～一六九六)は、延宝四年(一六七六)に日本に渡来し、すぐれた人格や学識により、水戸黄門の庇護を受けた。この東皋禅師が幕府の儒官であった人見竹洞(一六三七～一六九六)や、旗本の杉浦琴川(一六六〇～一七一〇)など優秀な弟子を得たことによって、琴楽は普及し始める。江戸明治時代を通して、全国的に普及したが、日清戦争以降は急速に衰微し、昭和三十年代には廃絶した。

※図録「第七六回 杏雨書屋特別展示会」の五八頁の新宮涼庭(一七八七～一八五四)による「書画文巻」のなかには、草堂のなかで琴を奏でる高士の姿が描かれており、あるいは当時の琴楽流行が背景として作用しているのかもしれない。

#### 資料④【村井琴山】<sup>1</sup>

村井琴山(一七三三～一八一五)、名は純、字は大年、通称は椿寿。古方派の医者として著名であり、独特の理論をもって知られた吉益東洞に師事して、仁術を修めた。著書は医学関係に『医道二千年眼目編』『古医葉量考』『読類聚方』『方極刪定』『葉徴続編』などがあり、琴学関係に『琴山琴録』(刊本・草稿本)『琴学或問』(散逸)がある。惜しいことに詩文集は、伝わらない。

風光明媚な「叢桂園」を営み、「玄響堂」という堂を建て、そのなかに「玄響」という銘の琴を納めた。六張の琴を所蔵していたが、いずれも伝来していない。

※図録「第七六回 杏雨書屋特別展示会」の五八頁の「旅中花」の和歌の短冊は、村井琴山のものである。

#### 資料⑤【村井琴山における「琴学」の追求】

<sup>1</sup>村井琴山の琴学については岸边成雄『江戸時代の琴士物語』(有隣堂、二〇〇〇年)、稗田浩雄『近世琴学史稿(修訂版)』(東洋琴学研究所、二〇二〇年)に詳しい。

・『琴山琴録』「跋」

琴者、聖人大器而為樂之統矣。君子所常御者、琴最親密、不離於身。……今海内琴法、皆出于心越・萬宗二僧氏之手、多是明清俗間之法也。二僧氏安知雅俗之分乎。余故不喜二僧之琴、竊嘆嗟久矣。嘗遊長崎、邂逅于清人潘渭川者、偶受琴法手勢及「南風」「滄浪」二曲。

琴は、聖人の大器にして樂を為すの統なるかな。君子の常に御する所のもの、琴最も親密にして、身を離れず。……今海内の琴法、皆な心越・萬宗二僧氏の手に出で、多くは是れ明清俗間の法なり。二僧氏安ぞ雅俗の分を知らんか。余故に二僧の琴を喜ばず、竊に嘆嗟すること久しいかな。嘗て長崎に遊び、清人の潘渭川なるものに邂逅し、偶ま琴法手勢及び「南風」「滄浪」二曲を受く。

↓琴は「聖人の大器にして樂を為すの統」。儒教的価値観を正面から持ち出す。

↓仏僧による師承関係に組みこまれるのを拒否。

↓潘渭川は、杭州の人。科擧に落第して商人となり、長崎に滞在する。

↓琴山における強烈な儒学的意識を確認できる。

資料⑥【琴山の奏でた琴曲の種類】

・『琴山琴録』「琴傳説」

平日……歌「南風」「滄浪」二曲、或彈「猗蘭」、此外不奏。余嘗得朱紫陽所考「詩樂譜」。試取「關雎」「鹿鳴」二詩、施其手法、自覺有得其梗概。右五譜、是余之所常奏也。

平日……「南風」「滄浪」の二曲を歌ひ、或ひは「猗蘭」を弾じ、此の外は奏でず。余嘗て朱紫陽が考ふる所の「詩樂譜」を得たり。試みに「關雎」「鹿鳴」二詩を取り、その手法を施すに、自らその梗概を得ること有るを覺ゆ。右の五譜、是れ余の常に奏する所なり。

↓常に奏でていたのは「南風」「滄浪」「猗蘭」「關雎」「鹿鳴」の五曲。

資料⑦【琴山の奏でた琴曲①「滄浪歌」】

・『琴山琴録』「滄浪歌」<sup>2</sup>



れ、濁れば斯に足を濯はれん。自らこれを取るなり」。

↓子供が歌っていた歌詞についての孔子の解釈。

↓「纓」は冠を結ぶ紐。

↓澄んでる水であれば「纓」を洗ってもらえるが、濁り水であれば汚れた「足」を洗われてしまう。どのような目に遭うかは、清濁どちらを選ぶかの自身自身の選択の結果である。

・ 出典①『楚辞』「漁父」

屈原既放、遊於江潭、行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之、……屈原曰「舉世皆濁、我獨清……是以見放」。漁父曰「聖人不凝滯於物、而能與世推移。世人皆濁、何不泥其泥而揚其波」。屈原曰「……安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎」。漁父莞爾而笑、鼓枻而去。歌曰「滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足」。遂去、不復與言。

屈原 既に放たれて、江潭に遊び、行く澤畔に吟ず、顔色憔悴し、形容枯槁せり。

漁父見てこれに問ふ……屈原曰く「世を舉げて皆な濁り、我獨り清む……是以に放たる」。漁父曰く「聖人は物に凝滯せず、而して能く世と推移す。世人皆な濁らば、何ぞその泥を漉してその波を揚げざる」。屈原曰く「……安ぞ能く皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんか」。漁父 莞爾として笑ひ、枻を鼓して去る。歌ひて曰く「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふべし、滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふべし」。遂に去り、復た與に言はず。

↓楚の屈原は、忠義の志が厚かったのに、讒言によって王から追放されてしまった。やるせない気持ちを抱いたまま徘徊するうちに、自由な考えかたをする漁師に出会った。

↓漁師は去りぎわに屈原に向かって歌った。「澄んでる水であれば『纓』を洗えばいいし、濁り水であれば足を洗えばいい。清濁に、こだわるな」。

↓後世の文学では、『楚辞』「漁父」の解釈のほうが主流。

資料⑨【琴山の奏でた琴曲①「南風」】

・『琴山琴録』「南風」

琴山琴錄正編中卷終  
 若笑况復如調絃入弄最是俗傳士君子  
 何詠玄默道士陳搏之為然今取此譜者  
 惟以非二僧氏之傳而請得之安東家者  
 也并以潘渭川手法授之南豐門徒曾士  
 功云爾

琴山琴錄正編中卷終

琴山琴錄正編下卷

南風

徵音

南風之薰兮可以解吾  
 鼗之愠兮可以解吾  
 鼗之愠兮可以解吾  
 南風之時兮可以解吾  
 世筍之愠兮可以解吾  
 民之財兮

南風之薰兮

南風の薰ぜる

可以解吾民之愠兮

以て吾が民の愠いかりを解くべし

南風之時兮

南風の時なるかな

可以阜吾民之財兮

以て吾が民の財を阜ゆたかにすべし

・『孔子家語』「辯詩樂」

昔者舜彈五絃之琴、造南風之詩。其詩曰「南風之薰兮、可以解吾民之愠兮。南風之時兮、可以阜吾民之財兮」。

昔 舜は五絃の琴を弾し、南風の詩を造る。その詩に曰く「南風の薰ぜる、以て吾

が民の愠を解くべし。南風の時なるかな、以て吾が民の財を阜にすべし」。

↓古代の伝説的聖王である帝舜は、五弦琴を奏でて「南風」の曲を作り、  
国を治めてゆく志について歌った。

↓『史記』「樂書」

南風之詩者、生長之音也。舜樂好之、樂與天地同意、得萬國之驩心。  
故天下治也。

南風の詩は、生長の音なり。舜樂みてこれを好み、樂は天地と意  
を同じくし、萬國の驩心を得たり。故に天下治まるなり。

資料⑩【琴山の奏でた琴曲③「關雎」】

↓「雅樂」を求めて。

↓「雅樂」の本義は、宗廟での祭祀や、天子や諸侯の公式の宴会のときに奏でる  
雅正なる音楽。

・『毛詩(詩経)』「關雎」

關關雎鳩 關關たる雎鳩は

在河之洲 河の洲に在り

窈窕淑女 窈窕たる淑女は

君子好逑 君子の好逑

參差荇菜 參差たる荇菜は

左右流之 左右に流むもむ

窈窕淑女 窈窕たる淑女は

寤寐求之 寤寐に求む

求之不得 求むれど得ず

寤寐思服 寤寐に思服す

悠哉悠哉 悠なる哉 悠なる哉

輾轉反側 輾轉 反側す

參差荇菜 參差たる荇菜は

左右采之 左右に采る

窈窕淑女 窈窕たる淑女は

琴瑟友之 琴瑟もて友とす

參差苜菜 參差たる苜菜は

左右苜之 左右に苜えらぶ

窈窕淑女 窈窕たる淑女は

鐘鼓樂之 鐘鼓もて樂しましむ

↓「關雎」の詩の本義については古来、婦道の大切さを説くもの、男女の情愛を説くもの、祝婚歌あるいは祭祀歌などの諸説がある。

↓いずれにせよ儒学においては、古代の聖人である周の文王あるいは周公に關連した詩として伝承されていた。

資料⑩【村井琴山の「關雎」】  
・『琴山琴録』「關雎」

句 勻 苜 羅 正

右出于琴譜大全手法受于潘渭川手勢今不圖之且面受手授焉枕按南羅之律手法本當作羅夕者名指按五絃十徽也然五上當有ハ字ハ者按字之略也凡撮之手法宜以之推知焉諸家琴譜或作南風撮或作南薰歌或作南薰操記曰舜作五絃之琴以歌南風今唯作南風東臯琴譜今撮作羅誤也

關雎

關 關 雎 鳩 在 河 之 洲 窈

窈 窕 羅 苜 勻 苜 羅 正  
窈 窕 女 子 好 逑  
參 差 苜 菜 左 右 流 之 窈  
窕 女 子 窈 窕 求 之 求 之  
窈 窕 女 子 窈 窕 求 之 求 之  
不 得 寤 寐 思 服 悠 悠 羅  
羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅 羅  
哉 輶 轉 反 側



唐（雅楽律）	唐（俗楽律）	現行	洋名
太簇 <small>たいさく</small>	黄鐘	壹越 <small>いちご</small>	D
夾鐘 <small>かしょう</small>	大呂	斷金 <small>たんだん</small>	#D / bE
姑洗 <small>こせん</small>	太簇	平調 <small>ひょうてう</small>	E
仲呂 <small>ちゆうりよ</small>	夾鐘	勝絶 <small>しょうせつ</small>	F
蕤賓 <small>ずいひん</small>	姑洗	下無 <small>しもむ</small>	#F / bG
林鐘 <small>りんしやう</small>	仲呂	双調 <small>そうてう</small>	G
夷則 <small>いそく</small>	蕤賓	鳧鐘 <small>ひやうしやう</small>	#G / bA
南呂 <small>なんりよ</small>	林鐘	黄鐘 <small>わうしやう</small>	A
無射 <small>むしや</small>	夷則	鸞鏡 <small>らんけい</small>	#A / bB
應鐘 <small>おうしやう</small>	南呂	盤渉 <small>ばんしやう</small>	B
黄鐘 <small>わうしやう</small>	無射	神仙 <small>せんせん</small>	C
大呂 <small>たいりよ</small>	應鐘	上無 <small>かみむ</small>	#C / bD

↓十二律の名前は「雅楽」と「俗楽」によって異なる。

↓「現行」は現代日本の雅楽における十二律名であり、その多くが唐代燕楽の律名に基づく。

↓琴山は、この譜面に基づいて琴曲に編曲した。

### 資料⑬【村井琴山における編曲の姿勢】

#### ・『琴山琴録』

純按『領宮禮樂疏』曰「大抵琴主散聲、實音次之。泛音鄭聲、君子弗貴。是以左手綽・注・吟・猱、右手疾・徐・輕・重、雅樂禁焉。琴理雖淵、雅音尚簡」。……然今觀明譜、雖其辭用古詩古曲、亦至其手法、則綽・注・吟・猱・發・刺・泛・奄最多。是皆繁音煩手、豈取之君子者雅正之聲乎哉。

純按ずるに『領宮禮樂疏』に曰く「大抵は琴は散聲を主とし、實音これに次ぐ。

泛音は鄭聲にして、君子貴ばず。是を以て左手の綽・注・吟・猱、右手の疾・徐・

輕・重は、雅樂これを禁ず。琴理は淵ふかきと雖も、雅音は簡を尚ぶ」。……然るに今

明譜を観るに、その辭は古詩古曲を用ゐると雖も、亦たその手法に至れば、則ち綽・注・吟・猱・發・刺・泛・奄最も多し。是れ皆な繁音煩手にして、豈にこれを君子者の雅正の聲に取らんや。

↓『領宮禮樂疏』は天文学者・数学者として知られる、明の李士藻（一五六

五〜一六三〇）の著。

↓華麗な指法を徹底的に排除する。

↓礼楽思想における「雅音は簡を尚ぶ」という「雅」の世界を追求する。

資料⑭【まとめ・村井琴山の「琴学」】

↓村井琴山のこのような医家における「儒医」の思想。

↓「儒医」における音楽。

資料⑮【医家における「儒医」の思想】

・黄震（一一二二～一一八〇）『黄氏日鈔』卷九十「贈台州薛大丞序」

天下之伎術、皆為民生蠹、惟醫為有益。故世或以儒・醫並稱尊之也。

天下の伎術、皆な民のために蠹を生ず、惟だ醫のみ有益となす。故に世 或は儒・醫を以て並称して、これを尊ぶなり。

・『國語』「晉語」

上醫鑿國、其次疾人。

上醫は國を鑿し、其の次に疾人なり。

・『潜夫論』「思賢」

上醫鑿國、其次下醫鑿疾。夫人治國、固治身之象、疾者身之病、亂者國之病也。身之病待鑿而愈、國之亂待賢而治。治身有黃帝之術、治世有孔子之經。

上醫は國を鑿し、その次に下醫は疾を鑿す。夫れ人の國を治むるは、固より身を治むるの象にして、疾は身の病にして、亂は國の病なり。身の病は鑿を待ちて愈え、國の亂は賢を待ちて治む。身を治むるは黃帝の術あり、世を治むるは孔子の經あり。

↓「儒・醫」あるいは「儒医」の思想。最高の医者は、国の病を治し、その次のレベルの医者が人の病を治す。

↓范仲淹（九八九～一〇五二）の言葉として宋代の随筆類に散見される「不為良相、必為良醫〔良相たらざんば、必ず良醫とならん〕」が思い浮かぶ。

↓琴山の音楽にたいする意識の根底としてあるもの。

資料⑯【「儒医」における音楽】

①孔子あるいは屈原の「滄浪」…高潔あるいは融通無碍の生き方

②帝舜「南風」… 経国済民、他者を利することを目標とする生き方

↓聖賢たちの生きかたに思いを馳せる。

↓音楽を通じた、古人の心の「追体験」。

③「關雎」「鹿鳴」

↓理想的な社会制度を形成する「礼楽」のなかの音楽。

↓簡易な演奏・旋律のなかに、深い精神性を読みこもうとする態度。

村井琴山の「琴学」は、「儒」の立場から、ある音楽を奏で、聴くことによって秩序が形成されるという「礼楽思想」の実践として位置づけられる。村井琴山の奏でた音楽を聴くことは、前近代の医家たちの内面的思想・精神をのぞき込むことに直結する。

↓これもまた「追体験」。聴く人の心と、琴山の心とが一つになる。

## 附録 新出資料の多紀藍溪筆「漁樵問答譜」について

資料①【琴曲「漁樵問答」の背景】

琴曲「漁樵問答」は、今日の中華圏の音楽界でも奏でられる機会の多い名曲である。宋代理學の流れをくむ哲學書『漁樵問對』は來歴に明瞭さを闕くものの、朱子などの道學者たちを始めとして當時の社會に廣く受け入れられた。

結果として早ければ北宋、遅くとも南宋の『紫霞洞譜』編纂時までには、その別名を直接にもちいた琴曲「漁樵問答」が成立し、やがて千古の後にまで奏でられる名曲になった。

『漁樵問對』の受容史の上で、思想的内容以外にもうひとつ注目すべきことは、「漁樵」の二人の隱者が山水のなかで語りあう舞臺設定そのものである。「漁樵」が問答するイメージは、言語・音樂のいずれの方面においても廣い枠組みをもち、哲學的思索・精神的交流・山水の風景などの各種の要素を、そのなかに包括できる。音樂方面から説くならば、琴曲「樵歌」「山居吟」「漁歌」「欸乃」「澤畔吟」などの要素を、一曲のなかに併せ持つ。つまり、この舞臺設定は、奥ゆきのある意境を醸しだせる可能性を秘めており、琴曲「漁樵問答」において有効活用されたといえる。

資料②【日本における琴曲「漁樵問答」の受容】

さて日本近世における琴學の傳承は、東皋心越禪師（一六三九～一六九六）によってもたらされ、人見竹洞（一六三七～一六九六）や杉浦琴川（一六六〇～一七一）など優秀な弟子を得て、やがて全國に普及していった。杉浦琴川の家臣であり、一説には東皋禪師から親しく指法を授けられたという小野田東川（一六八四～一七六三）は、のちに教授方法を日本の家元制度にならって整備し、その傳授十六曲のなかで「漁樵問答」を最高奥義の秘曲として位置づけたという。この一曲がとくに選ばれて秘曲化された背景については全く不明であるが、東川はその響きのなかに己の理想とする何かしらを見いだしたのだろう。<sup>5</sup>

資料③【多紀藍溪筆「漁樵問答譜」における琴曲「漁樵問答」のバージョン】

・楊掄（字は鶴浦）の編纂した『真傳正宗琴譜』の「漁樵問答」である。

↓楊掄は何度か琴譜をまとめて出版しているが、「漁樵問答」が含まれるのは萬曆十七年（一五八九）の進士李文芳の序のある『真傳正宗琴譜』。

<sup>5</sup> 岸邊成雄『江戸時代の琴士物語』有隣堂、二〇〇〇年。山寺美紀子「藤澤東暎と七絃の琴（きん）——その琴系及び彈琴、琴學、琴事の實像について」『關西大學東西學術研究所紀要』、二〇一六年、一四二頁。



見轟嶠嶠嶠有路通野客並那山翁似  
 尺句句池也苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 更有松風避世道遙茫然不知南北與那  
 池苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 西東山無曆寒到便知冬山寺遠迥不聞  
 芍苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 鐘聲仰觀那懸崖峭壁峻坂高峯飛泉瀑  
 芍苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 太古遺音  
 三 漁樂問答

布隨意縱橫迹名天地外也。有甚麼那愁  
 池苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 容大嘯一聲山谷皆鳴無星碍別紅塵却  
 疑身在五雲中。  
 第肆段 漁 獲魚縱樂  
 淨魚時將來細剖需此斗酒乘月泛滄浪

江方涉湘浦也却又行到那巴丘淺水汀  
 池苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 洲懶見那鷓鴣相持向午也就歸舟誠恐  
 飛蕩句返回句苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 風波突起處灘瀨漲惡要休時急忙怎得  
 蜀句句句句句句句句句句句句句句句  
 太古遺音  
 五 漁樂問答

甚恁句句句句句句句句句句句句句句  
 畫醉而休高歌那一曲信口胡謔無腔笛  
 尺五句句句句句句句句句句句句句句  
 雅韻悠悠撇却許多閑愁又何憂  
 句句句句句句句句句句句句句句句  
 第五段 樵 危崗禁足  
 看他步入雲窩過此羊腸鳥道聞些猿啼  
 芍苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 太古遺音  
 四 漁樂問答

鶴唳恍似王質也爛柯雪深泥滑兮怎奈  
 池苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 如何險危坡要斟酌不如輕輕束擔免蹉  
 芍苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 第陸段 漁 鷺溇羅釣  
 三江五湖任我遨遊有時下絲綸獨釣寒

着金貂月白風清受用不了  
 苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 第捌段 漁樂  
 漁翁樵子也俱是麻陵呂望輩振起乎那  
 轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟轟  
 高標樂山樂水樂陶陶看漁樵樂意多饒  
 甚最箇最單  
 幕天席地風騷戴月推敲  
 太古遺音  
 六 漁樂問答

第柒段 樵 浮雲富貴  
 山林居士原不愛去趨朝烟霞老叟清操  
 苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 絕俗轉高披粗衣食淡飯也草舍團瓢閑  
 濁苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞  
 談今古何羨重茵鼎食懸佩紫綬並那戴  
 蜀苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞苞

資料⑤【備考】

- ・ 扇面という発想がユニーク。
- ↓ 他者への贈答？自身の心覚えのため？
- ・ 単語や続く言葉に中線が引いてあるのは、続けて歌うための注記としても作用する。
- ・ 一部の漢字の右側に朱線が附してあるが目下、その意図は不明である。或いは歌う時の旋律を「博士譜」のように書きだしたものであるうか。後考を待つ。